

消防職員 コロナで体験

消防職員がコロナ禍での
救急活動中に主に
体験したこと
(複数回答可)



ゴーグルやフェースシールドが曇るなど、感染防護装備のために活動しにくかった 83.8%

傷病者に発熱があるだけで、感染リスクや消毒などを考えなくてはならなかった 67.8%

感染を判断する基準から外れている傷病者でも感染しているのではないかと思った 51.4%

帰署後の車両、資器材や体の消毒、洗浄に時間を要し、次の出動に支障が出た、または出る恐れがあった 50.7%

感染防護衣での活動は暑くて、体調管理が難しかった 49.9%

名城大など全国調査

救急「不安と負担」9割

新型コロナウイルスの感染が広がる中、救急活動にあたる消防職員の九割が感染に不安を覚え、感染を防ぐ特別な装備での活動に負担を感じている。そんなアンケート結果を名城大の畑中美穂准教授(社会心理学)と筑波大の松井豊名誉教授(同)が八日、発表した。コロナ禍での救急活動に関する全国規模の調査結果が公表されるのは初めてという。(芦原千晶)

畑中准教授らは、コロナ禍で救急活動の負担が増しているにもかかわらず、医療従事者に比べて消防職員を対象にした研究がほばないことに注目。全国の消防関係の団体などに調査を呼び掛け、八月五～二十八日、救急活動を担った消防職員約二千二百人からオンラインで回答を集めた。

救急活動に関する質問(複数回答)では、八割以上が「ゴーグルやフェースシールドが曇るなど、感染防護装備のために活動しにくかった」と回答。約七割が「傷病者に発熱があるだけで、感染リスクや消毒などを考えなくてはならなかった」と答えた。また、二割の職員が「感染防護衣などを何度も洗って使った」という。

さらに、九割の回答者が、自身の感染だけでなく、家族や同僚への感染不安を覚え、その度合いは感染者の多い地域ほど強かった。必要な対策として求めたのは、「感染危険手当の支給」(75%)、「涼しい感染防護服の導入」(67%)、「全員の定期的PCR検査」(53%)の順に多かった。

自由記述では「このままでは救急隊を続けたくない」などの切実な声も届いた。畑中准教授は「消防職員が大きな不安やストレスの中で活動している現状が明らかになった。このままでは離職やメンタルの不調につながる」と懸念。負担に見合った手当の検討や、不足している資器材の確保などについて提言した。